あなたを訴える者と一緒に道を行く時には、その途中で早く仲直りをしなさい。そうしないと、その訴える者はあなたを裁判官にわたし、裁判官は下役にわたし、そして、あなたは獄に入れられるであろう。よくあなたに言っておく。最後の一コドラントを支払ってしまうまでは、決してそこから出てくることはできない。

三章　ワーの戦士

法月正臣（ほうづきまさおみ）は失敗者である。

失敗者とは言っても、人生のレールに乗り損ねたわけでもなく、犯罪によって道を踏み外した訳でもない。しかし正臣は、確かに十歳の誕生日も間近な小学四年生の秋、人生の失敗者に成り果てたのだ。

正臣は神戸へ移り住む前は、東京に暮らしていた。東京と言っても都市部ではなく、西多摩郡という、自然の多い端の部分である。

山が多く、見渡せば森ばかりで、その代わり空気だけは澄んでいる。幼い日の正臣はそんな病院の中で暮らしていた。

正臣がこの病院にやってきたのは、幼少期から患っている内臓の疾患が原因である。今となっては細かいことまで覚えていないが、先天的な虚弱を抱えていたらしい。

成長と共に内臓の器官は強まるので、臓器移植などは必要ないことが救いではあった。

しかし、それは医師の管理による万全な体制の下で成長すればの話であって、幼少期の正臣には、自宅で自由に生活する権利は与えられていなかったのである。小学校に入る年齢になると、病院から学校へ通学する日々が続いた。

たまの楽しみは弟の祐介と一緒に街中に出かけて遊ぶことだ。まんが本を買ったり、あとは模型などを買ってきたりしては、それを病室で作るのを楽しみにしていた。弟や

妹、家族と過ごすことが出来るのは、週に二日、土日だけだ。
「中学校に入学するまでには退院できますよ」
担当医のその言葉が正臣にとっては励みになっていた。身体の弱さや、担任からの特別扱いが原因で、学校の中になじめずにいたが、中学になれば状況は好転するはずと、それだけを心の支えに毎日を過ごした。
そんな正臣の病院生活が多少でも明るくなったのは、小学二年生の頃だった。隣の病室に、美人な年上の女性が入院してきたのである。
その少女は晴海と名乗った。優しく綺麗なその人に、正臣は初めて恋をした。何か難しい病気を罹っているらしく、正臣と同じく療養が必要なのだと聞いた。
しかし、そんな病気など全く感じさせないほどに晴海は快活で、正臣が病室を尋ねても、嫌な顔一つせず相手してくれたのである。
年齢は十二歳。正臣より四つ年上であった。
正臣は、構ってくれる優しい晴海を「晴海ねぇ」と呼んで大いに慕った。「晴海ねぇ」は本が好きな人で、常に病室の中にはジャンル問わず様々な本が置いてあった。図鑑、小説、風景写真集、画集、中には聖書まで置いてあった。
「晴海ねぇ」は特に物語を読むのが好きな人で、様々な冒険小説をいつも読んでいた。正臣は、普段は小説など読む人間ではなかったが、「晴海ねぇ」を通して小説のあらすじを聞いては目を輝かせた。特にジュール・ベルヌの地底旅行や、海底二万マイルの世界

は胸が躍った。
「晴海ねぇ、俺、いつか海賊になりたい」
「海賊船の船長か。いいね。じゃあ私も船員にしてもらおうかな？」
「その時は俺のことは船長って呼べよ？」
「生意気だなぁ、年上なんだから私の方が船長なんじゃないの？」
そんな他愛もない会話をしながら、時間を潰すのが楽しかった。重苦しい、まとわりつくような嫌な影が、この時ばかりは付きまとわなかったからである。
基本的に病室というものは重苦しくて、正直長居していたい場所ではない。カーテンで仕切られたベッドは気が滅入るし、目立った病気がある訳でもないのに、虚弱故に一日中個室の中に閉じ込められていると、退屈に押しつぶされそうである。
何より病院のにおいが良くない。独特の濁った空気は、正臣の幼い嗅覚にはあまりにも苦痛な物であった。普段はマヒして何も感じなくとも、外に出て帰ってくると、病院の中のよどんだ空気にはしばらく吐きそうになる。新車の室内に入るのとどちらが嫌かと問われれば、正臣は病院のにおいの方が苦手であった。
学校から帰ってくると、そんな病室で申し訳程度においてある机で宿題を行い、時間になれば管理された食事を与えられ、夜の九時になると容赦なく消灯、眠らされる。
少年院にでも閉じ込められていた方が、まだメリハリのある生活が出来るのではないかと、正臣は常々病室の中で考えていたものだ。

たまの楽しみは母親が様子を見に来てくれること。あとは週末に家に帰って、祐介と外に遊びに行く時ぐらいだ。祐介、そして年が離れた妹の司とも、それなりに仲良くやれていたが、それも週に二日のみのこと。実家のリビングは、本当の意味で落ち着ける場所ではなかった。

そんな正臣にとって、「晴海ねぇ」は両親以上に多くの時間を共有してくれる存在だった。多分、姉が居たらこんな感じなのだろうかと、正臣は嬉しく思った。

病室で気が滅入るのは同じなのか、毎日突撃してくる正臣を晴海は鬱陶しがるどころか、待ち構えるように歓迎してくれる。

今から思えば、正臣は晴海に恋をしていた。勿論、所詮は小学生の淡い初恋であったから、付き合うとか告白するとか、そういった具体的な話に発展することはなかった。

そして、「晴海ねぇ」との楽しい毎日が始まって一年ほど経った小学校三年の春。

正臣は医者の想定よりも遥かに早く、内臓機能の安定した成長が確認されて、退院できることになった。

医者の見立てでは、あと二、三年は掛かるはずであったが、おそらく隣室の「晴海ねぇ」との会話が良かったのだろうと解釈された。病は気からというように、精神衛生の良し悪しは、身体の健全な成長や病気の回復に大いに役立つからである。

かくして、正臣は実家での生活に戻ることが出来た訳だが、無条件で無罪放免とはいかなかった。

週に一度の通院や、家での献立表提出などが義務付けられた、条件付きの釈放だったのである。退院後にジャンクフードを食べるのを楽しみにしていた正臣は、その道が断たれてがっくりしたが、「外に出られるだけましだよ」と、けらけら笑う「晴海ねぇ」に慰めてもらうと、それもそうかと気を取り直すことが出来た。

そういう訳で、正臣は週に一度、この病院に訪れ続けた。勿論、診察を受けた後は、「晴海ねぇ」の病室に立ち寄って、面会時間終了ぎりぎりまで入り浸った。週に一度しか逢えなくなってしまったが、正臣がやってくると、「晴海ねぇ」はいつでも正臣の事を歓迎し、受け入れてくれたのである。

「今日は学校で何があったの？」

「からかわれたんで喧嘩しちゃったよ」

「へぇ、それでその頭のたんこぶな訳だ。で、勝ったの？」

「負けた。だめだ、体に力入らねぇんだもん」

「やっぱり。退院したてでさ、喧嘩なんてするからだよ」

「しかたねえだろ。でも、俺は鍛えてもっと強くなるぜ。さっそく腕立てしてたらさ、母さんが真っ青になって止めにかかってきたけど」

制約付きとはいえ、外に出る自由を得た正臣であったが、結局、「晴海ねぇ」とこんな他愛もない会話をすることが、正臣にとっては週に一度の一番の楽しみであることに変わりはなかった。

退院して家に戻ろうが、小学校での灰色の暮らしが改善されることはなく、からかわれては喧嘩をし、絡まれては殴られての繰り返しだったからである。
正臣にとって、「晴海ねぇ」こそが、もっとも親しい友達だった。週に一度の見舞いは、「晴海ねぇ」の為ではなく自分自身の為に、退院してから一年間、当たり前のように続けられたのである。
正臣が失敗者になったのは九歳になり、小学校四年に上がった秋の事であった。

いつものように尋ねてきた正臣は、晴海に突然逢えなくなった。部屋の入り口に掛けられた札は「面会謝絶」。
こっそり開けて覗いてみると病室の中に晴海の姿はなく、どこかにある集中治療室に運ばれているとのことだった。
病状の悪化による面会謝絶だったのである。仲良くしていた看護婦の「白井さん」が、しょーにせいなんとか病という晴海の病名をこっそり教えてくれた。
しかし幼い正臣にそれを正しく覚え、理解することはできなかった。
次の週に正臣が病室を訪れると、面会謝絶は既に解除されていた。いつもよりも痩せた顔で、いつもは被っていない帽子をかぶって、「晴海ねぇ」は正臣の事を出迎えた。
せきついえきどなーのけつじょによるせじゅつのおくれでどうのこうの、と「白井さん」が正臣に説明してくれたが、正臣に理解できるものではない。いつものように椅子

に座って「晴海ねぇ」に話しかけたが、帰ってきた返事は、「ごめんね、正臣。今日は少し眠っていいかな？」というものであった。苦笑いしながら自分にそんなことを言う晴海に、正臣は口をとがらせて帰路を踏んだのである。

次の週にやってくると、晴海ねぇはやはり帽子をかぶっており、更に痩せていた。長い黒髪が短くなって、帽子の端からわずかに見えているのみであった。

綺麗な黒髪はどこに行ったのか。「髪切ったの？」と正臣が質問をすると、晴海は苦笑して、「イメチェンしたの」と言って見せた。

先週より更に体の具合が悪そうなその様子を見れば、流石に子供の正臣でも寝ていた方がよさそうだという結論に達する。

心配して「今日も帰るから寝てなよ晴海ねぇ」と言うと、晴海は「今日は帰らないで」と正臣を引き留めた。

その表情はいつになく真剣そのもので。正臣はその日、初めて親に無断で外泊を行った。ベッドの下に隠れて看護婦さんの巡回を回避しつつ、一晩中晴海ねぇとの話し相手になったのである。

親が心配してるだろうとか、悪いことをしているなとは思ったが、正臣にとっては家族よりも「晴海ねぇ」の方が大切だった。

正臣は眠い目をこすりつつ、深夜になっても晴海ねぇと話し続けた。勿論ひそひそ声で。その中で差し込む月明かりはとても青白く、美しくて、唯々病室は静かに光り輝い

ていた。病室では夜更かしをしたことが無かった正臣にとって、長年親しんだはずのその病室は、まるで異世界のように見えた。
月明かりに蒼く照らされた「晴海ねぇ」は、痩せているのにとても綺麗で、正臣はその姿にしばらく見惚れてしまった。正臣が女性に見惚れたのは、これが人生で初めてのことであった。二度目は、遥か未来に体験することになる訳だが……
「正臣、もう病室には来ないで欲しいの」
夜明けも間近になった病室の中で、正臣に晴海は急にそんなことを言った。
今日は帰らないで欲しいと引き止めたり、もう来るなと言ったり、言われていることの意味が理解できなくて、正臣は晴海を凝視してその理由を尋ねる。
「私ね、もう二、三カ月ぐらいしか生きられないらしいの。お医者さんに昨日言われたの。これから、どんどん痩せていくって」
そういって晴海が帽子を取ると、帽子の隙間からわずかに覗いていた髪以外は全くなくなっていた。あんなにきれいで長かった黒髪は何処へ行ってしまったのだろう。
「もしかしたら、お医者さんがいう以上に生きられるかもしれない。なんだかんだで一年も二年も元気に生きた人もいるって。でもね、これから、こんな風にどんどんかっこ悪くなっていくらしいの。表情も変になるって。私ね、正臣にだけはそれを見られたくないの。できれば、少しでも綺麗なままで君の記憶に残りたい」
正臣はその晴海の言葉に返事をしなかった。答えなど当然決まっていたからである。

病室を去って家に帰ったのち、両親にこっぴどく怒られたが、正臣は懲りずに週一どころか、毎日病院へ出かけるようになった。もう来ないでと言っている晴海の病室に、毎日通い始めたのである。

「どうしてお願いを聞いてくれないかな」

晴海は困ったように苦笑いしたが、しかしそれでも訪ねてくる正臣の姿に少し嬉しそうでもあった。自分の姿を見られたくも無いが、終わりの近い時にあって、好きな相手が熱心に訪ねてくれるのも嬉しかったのである。

しかし、それもひと月過ぎるまでであった。日に日に痩せていく体に、思い通りに動かなくなる手足。顔の表情も強張り始め、いよいよ、自分が醜くなっていくのを晴海は自覚し始めた。

そんな中、自分の好きな相手が、毎日自分の姿を見にやってくる。

嬉しい反面、苦痛でもあった。好きな相手だからこそ、綺麗な姿を見せたいのに、自分は醜くなっていくばっかりで。それはとてもとても辛い事であった。

そのストレスに、晴海はとうとう耐え切れなくなってしまったのである。晴海はある日、正臣に対して爆発した。

「どうして此処に来るのよ！　毎日毎日、そんなに私の顔をみて楽しいの！？」

正臣はやってくるなりいきなり怒鳴られて、目を丸くしてお見舞いの花を落としてしまう。一応なけなしの小遣いで買った花束だったのだが、晴海には花束が見えていない

らしい。
「私はね、綺麗なままでいたいの、綺麗なものしか見たくないの。旅行したいの、船に乗りたいの。世界で一番綺麗なものが見たいの。こんな自分の姿なんてもう見たくない。そのうち、私はちゃんと喋れなくなる。顔も汚くゆがんで、正臣にだって嫌われる。もう見ないでよ、私の顔を見ないでよ！」
激しい剣幕に、はっきりとした拒絶の声。「晴海ねぇ」にはっきりと拒絶されたのは初めてで、正臣は恐ろしくなって病室から逃げ出した。その日は結局、花束を渡すことが出来ず退散することになったのである。
「なんで？」
正臣は震えながら自問した。来るなと言いながらも、あんなに嬉しそうな顔をして出迎えてくれていたのに、自分は何か悪いことをしただろうか。
なんで今日になって急に逢ってくれなくなったのだろうか。正臣にはその理由を推し量ることは出来なかった。
それから、正臣はまた晴海ねぇに怒鳴られるのが怖くて、病室には行けなくなってしまった。いつ逢えなくなるか分からない。だから拒絶されてでも行かないといけない。心の中では既に答えが出ているのに、どうしても出かけることが出来なかった。
一日経ち、二日経ち、そしてとうとう一週間過ぎた。
「兄貴、本当にそれでいいのかよ」

きっかけは弟の祐介の言葉だった。弟に言われ、正臣はようやく踏ん切りがついて立ち上がった。

情けない話だが、どうして今までぐずぐずしていたのか、自分でも説明が出来なかった。「晴海ねぇ」は世界で一番綺麗なものが見たいと言っていた。なら、それを持っていけば許してくれるのではないかと正臣は考えた。

正臣の知っている世界で一番綺麗なもの。

それは幼い頃より病院の窓から毎年見つづけた、西多摩郡の綺麗な紅葉の落ち葉だった。これを腕の中に沢山もって、晴海ねぇに逢いに行こう。

正臣はそう考え、病院に向かったのである。今更何で来たのか、そんなふうになじられるのは覚悟の上だ。今行かないと一生後悔する。正臣は腕に落ち葉を抱えて、病院のある丘へとひた走った。

息を切らして、病棟に入り、看護婦さんに挨拶をしながら病室に走って。

そして空っぽになった、「晴海ねぇ」の部屋を目の当たりにしたのである。

正臣はこうして、失敗者になった。

看護婦の「白井さん」が、後ろから「晴海ねぇ」が二日前に亡くなったことを教えてくれた。「白井さん」はその後も慰めるように言葉を続けていた気がするが、正臣には既にそんな言葉は聞こえていなかった。

何故、あそこで怯んだのか、何故、あそこで恐れて前に進まなかったのか。

「正臣くん、預かりものがあるの」
呆然と自問自答していると、「白井さん」は正臣に手紙を渡してくれた。
可愛らしいレターセットの封筒に入っている、「晴海ねぇ」からの手紙である。
正臣は慌ててそれを「白井さん」からひったくり、中を開けて読み始める。
手紙の文面はとても落ち着いていて、これから死ぬ人が書いたものの様には決して見えなかった。文面から伝わってくるのは満足感。一文字一文字が、震えることもなく丁寧につづられている。
晴海ねぇは、こんな大人の字が書ける人だったことを、正臣は初めて知った。

『大好きな正臣へ。
もう来るなって言ってごめんなさい。正臣の事が大好きだったから、最後の姿を見られたくなくて。もう来ないで欲しいって嘘をつきました。赦してください。
本当は貴方の事が大好きでした。正臣の心の支えになれることが私の生きがいでした。……私はとっても幸せです。貴方にこんなに愛してもらえたから。でも願わくば、もう一度でいいから貴方の顔が見たいです。手紙を渡して終わりにしたくない。貴方に直接謝りたい。逢いたい……あと何日生きられるか分からないけれど、待ってるから――』

――ああ、死にたくないな。君の側に居たいよ。正臣。

文面の終わりを最後まで読めず、正臣は手紙を広げながら膝をついて泣き崩れた。胸がいっぱいになって、何といっていいか分からなくなった。胸に大きな穴が開いて、痛いのに、誰にも痛いとは言いだすことができなかった。痛いのは自分のせいなのに、今更誰に心が痛いなどと訴えることが出来るだろうか。

何故あそこで立ち止まった。
何故あそこで怯んだ。
何故、世界で一番大好きな人と、最後まで一緒に居てやることができなかった。

「俺は屑だ。失敗した。最後の最後でしくじった」
そう自分を責め続けて、正臣は慟哭した。
しかし責めたところで問題が解決されないことを知り、余計に胸が痛くなる。
なんでもいい、どんな手段でもいいから、取り返しはつかないのか。もうやり直しは効かないのか。今からでも、少しでも生産性のあることはできないのか。
――それは無理なこと。君が一番良く知っているはずだ。
何処からから声が聞こえ、やり場のない怒りをどこにも向けることが出来なくて、悔

しくて、悔しくて。ただ泣くことしかできない。
泣き崩れる正臣に、「白井さん」は一冊の本を差し出してくれた。正臣はそれを受け取り、中を開く。そこには何も書かれていない。白紙の日記帳だった。
「それ、白い本って言うんですって。晴海ちゃんが一番大事にしてた本なの。君に渡したいって、手紙と一緒にあずかったのよ」
正臣は鼻水をすすりながら、その本を受け取る。
「なんだよ、これ、何にも書いてないじゃないか」
「自分の書けなかった物語を、君に書いてほしい。そういう意味じゃないかな」
「白井さん」の言った言葉はきっと適当だ。その場しのぎの嘘だとしても、正臣にとっては嬉しい嘘だった。いつか書こう、晴海ねぇの書けなかった話を書くんだ。そう考えて、自分の自責の念から逃れることに必死だった。
結局、正臣は何も書かなかった。晴海ねぇから受け取った本は、今でも部屋の本棚に収まっている。
(そうだ。俺は白い本に触るのは初めてじゃない。俺は既に、白い本を持っていた)
過去の自分の失敗を夢に見ながら、正臣はそのことに気がついて愕然とする。
――私の可愛い失敗者。貴方はただ、行くべき道を間違えた。

何処からか聞き覚えのある少女の声が聞こえ、正臣の視界が真っ白になる。
その先で何をみた、その時に何に出会った。
正臣はそれを確かめる為に、勢いよく起き上がる。
「晴海ねぇ！」
叫んでから、自分が何かから覚めたことを自覚する。
そこは毛皮で作られたベッドの上。
自分が今まで夢を見ていたことを正臣はようやく自覚したのである。

○

ぼろぼろと涙を流して起きるのは、実は日常茶飯事である。涙を流し、鼻水をすすり、目を覚まして、それからしばらく、泣く。
自分が、大好きだった人の為に、まだ泣けることを確認して安堵する。
正臣にとってもっとも恐れているのは、あの失敗を過去のものとして忘れてしまうことであり、大好きだったあの人を忘れて、あの人の為に泣けなくなることだ。
きっと、十年経ち、二十年経ち、やがて「晴海ねぇ」は過去の人になる。その日が来ることが、今はただひたすらに怖い。
今年で十年目。まだ、晴海ねぇの為に自分が泣いていることを確認して。正臣はただ

ひたすらに安堵した。
これ以上の女性は必要なく、これ以上の幸せは必要ない。いつの日か、教会の中で芽音に「彼女は間に合っている」と返答したことは、心からの言葉であった。
最早手を伸ばしても、あの人には届かない。
だから、せめて正臣は「晴海ねぇ」の為に、何時でも泣けるようでありたかった。ただのくだらない感傷に過ぎないのは百も承知だが、これは失敗者の正臣にとっては、何より大切な儀式である……のだが。
「おい」
横でよだれを垂らしながら、自分に抱き着いて眠っているA子を見て、正臣は眉をひそめて声をあげる。涙をぬぐい、手鼻をかんでから、正臣はA子をゆりおこした。
「おいこら、何でここで寝てるんだよ。お前のテントはあっちだろ」
「硬いこと言いっこ無しっすよ。ベッドが一人だとつめたいんす」
寝ぼけながら、あっためた布団をよこせと言わんばかりに、A子が毛皮の中に潜り込んでいく。鼻でもつまんで安眠を妨害してやりたくなったが、正臣は頭を掻いて起き上がった。そしてテントを出ると井戸へと向かった。
正臣とA子は、テレサ・ティガールに助けられて獣人の集落へと受け入れられていた。どういう訳か知らないが、獣人達の指導者である「グル」がテレサであるので、獣人達

はテレサの言うことを聞くのである。
「オハヨ、ホウヅキ」
井戸に行くと、二足歩行の犬がにっこり笑って声をかけてくる。
あれから一週間。正臣はA子に習いながら、この世界の「共通語」を学んで、なんとかカタコトでのあいさつぐらいなら出来るようになっていた。この獣人達は、この世界では「ワー」と呼ばれている連中らしい。
ワーと言うのは総称で、ワーウルフとか、ワーキャットとか、ワータイガーとか、いろいろと細かい名前に枝分かれするらしい。
強靭な肉体を持ち、怖ろしいほど俊足で、狩りや羊を飼いながら遊牧生活を行っている。正臣とA子は、時折現れる奴隷狩りの人間たちと間違えられたようで、それで殺されそうになっていたようだ。
奴隷狩りとは船に乗ってやってくる人間連中で、ワー達を魔法などで捕獲して無理やり船に乗せて連れて行くらしい。テレサが、この人たちは違うとワーの面々を説得すると、正臣とA子は物凄い勢いで謝罪された。
転んでも泣かない。
悪いと思ったら謝る。
人の嫌がることはしない。
ルールを守らない人はみんなでやっつける。

これがワー部族の鉄の掟らしい。かくして、正臣達はしばらくの間、このワーの集落に厄介になることになった。
他にもいくつかワーの集落はあるらしく、テレサはそれを巡回しながら、宗教指導のようなことをしているらしい。
ワーは一日三回お祈りする。それが彼らの宗教のようだ。
原始的な生活と、アミニズムに代表される信仰要素は不可分である。テレサのような宗教指導者の言葉はまさに神の託宣なのだろう。
テレサは、一通り正臣達を助けると、多くを語る前に姿を消してしまった。
捕まえて問い詰めようと思ったが、ひと段落ついた頃には、彼女は既に旅立った後だったのである。
今となっては、彼女が本当にテレサだったのか定かではない。
しかし、明らかに正臣を知っている様子だったので、十中八九テレサ本人で間違いないだろう。
「オハヨウ、カラッテ」
正臣がカタコトで返事を返すと、ワーウルフのカラッテはにっこりと笑って見せる。ぱたぱたとしっぽを振る姿はとても愛らしい。
「ホウヅキ、ヒツジクウカ？」
「ハイ、クウ」

カラッテ

相手の言っていることは漠然とわかる。自分から話せるのは、本当に単純な返事と挨拶のみだ。これが現在の正臣の共通語の習得状況である。

文法そのものは非常に簡単で、英語よりもはるかに解りやすい。

複数形、過去時制、未来時制、現在完了などの文法が時制冠詞を一つつけるのみで事足りるのと、単語の変化も、過去形、現在形、未来形、また女性名詞、男性名詞等の変化が一切ないので、とりあえず単語さえ覚えれば何を言っているかはわかるのである。

端的に言えば例文に表すと、「正臣、リンゴ、たべる」「正臣、これから、二個、りんご、食べる、か？」「正臣、むかし、いっぱい、うまい、リンゴ、たべる」といった変化しかないのだ。

A子曰く、「共通語はこの世界で一番簡単な共通言語」らしく、もっと繊細な表現は、それぞれの部族が持っている母国語で行うらしい。誰でも覚えやすく、簡単な反面、語彙に乏しく、微妙なニュアンスのやり取りができないのが共通語の弱点だそうだ。

この共通語の他に、エルフ語、ドワーフ語、リザードマン語、インプ語、ゴブリン語（蛮族共通語）などがメジャーな言語らしく、魔法を使うためには、上位魔法帝国語、下位魔法帝国語、神聖語、暗黒語、竜言語など、覚えなければいけない言語は様々であるという。

そんな話を聞くとげんなりするが、共通語だけで良いなら割と早い段階で覚えられそうだ。何しろ、このワーの諸君は、羊、肉、魚、乳、チーズ、酒、狩り、追う、獲物、

食う、寝る、遊ぶ、踊る、歌う、ぐらいしか、日常会話の単語を使わないからである。
狩り行くか？ 羊追うか？ 肉食うか？ 酒食うか（飲むも食べるも同じ単語を使う）？ぐらいしか話しかけてこないのである。
食う、と正臣が返事をすると、ワーウルフのカラッテは嬉しそうに、肉の串焼きを差し出してくる。ワーの人々は羊の肉やチーズなどの乳製品しか食べないようだ。あとは狩りを得た獲物や魚、また採収した豆を食べる。
ビタミンの補給は草食動物の内臓から行うらしい。完全に肉食生活である。
朝から肉を食う生活になるとはと思いながらも、カラッテの好意はありがたく受け取らせてもらう。
羊肉は独特の香りがある。最初は臭いとおもいながら食べていたが、一週間も食べ続けていると、これが逆に癖になり始める。
口の中で歯ごたえのある肉を延々と噛んでいると肉汁が染み出し、味が良く湧いてくる。肉を焼いて岩塩をまぶすだけでこんなに旨いのかと正直驚いた。
「おお、いいっすね、私も羊食うっす」
やってきたA子が、カラッテに対して正臣より流暢な共通語で羊肉を要求する。お前も食え、とA子も串肉をもらって、正臣と仲良く並んで肉をもごもごと食べ始めた。
「ほらね、船長。状況は好転したでしょ？」
「テレサが居なかったら鍋の具材だったけどな」

間延びした口調で言うA子に、正臣が呆れたように声を上げる。明らかに結果オーライなこの状況だ。正直自分たちの力で切り抜けた訳ではない事実に、正臣は先行きが思いやられる。

A子はどんな状況に於いても冷静に行動をしている。何とも言えない場慣れした雰囲気は、どことなく一種の風格すらも感じられるほどだ。

あれからA子の出自に関して問い詰めたが、のらりくらりと交わされて要領を得ず、結局正臣は問い詰めるのをあきらめた。一応返答はするのだが、判るような、判らないような食えない返事ばかりで欲しい情報を一つも出さないのだ。

「私はエリに言われて随伴してる、道先案内人ってところっすよ。天の使いってことで天使ちゃんって呼んでもかまわないっすよ？」

なんて返答ばかりするものだから、ついついお前のような天使が居るものかと突っ込んで右手が忙しい。

A子の呼び名天使案は勿論即座に却下しつつ、正臣はA子をしかたなく釈放した。勾留時間には限度がある。やらねばならぬことはたくさんあるのだ。

腹ごしらえが終わると、A子と正臣は、さっそく地面に座って共通語の勉強を始める。ノートの類はないので、地面に枝で書いて勉強するのだ。

つい先日まで現役の受験生だった正臣にとっては、共通語の習得はそこまで苦ではなかった。生活に直結するという必要性も相まって、頭にすいすい入るのである。

「英語が赤点だった俺が、こんなところで才能を発揮するとはね」
「調子に乗ってると、課題のレベル引き上げるっすよ」
目を線にして、にやにやしている正臣をA子が見上げる。
しかし事実、正臣がいい気になるのも仕方が無いことで、A子が想定しているよりかなり速いスピードで正臣は共通語を習得している。
「観察力ぅ、ですかねぇ？ 加護の効果は出てるとおもうんで、思う他に早めに習得してくれると思います」
ぶつぶつ言いながら、A子は腕を組んで正臣の方を見やっている。
「出来る男ですから」と正臣が調子に乗っていると、後ろからワータイガーの大男がやってきた。以前に何度か出会ったことである。確か族長とか言っていた気がした。名前は聞いていないので知らない。
「ホーヅキ、シゴトダ」
ワータイガーの族長が、端的に用件を述べる。
「そうか、もう昼過ぎたもんな」
正臣は立ち上がって仕事の支度をする。
食ったら働く。それもこのワーの集落の掟であるからだ。居候しているのならば働くのは当然のこと。正臣も仕事に駆り出されるのである。

「くそ、出来る男……になりてぇ」
ぜぇぜぇと大きく息を吐きながら、正臣は羊を追いかけていた。羊が逃げないように、果てしない距離をぐるぐる回りながら、監視を続けないといけないのだ。
羊は一匹一匹名前が決まっており、間違えると拗ねて全くいうことを聞かない。
自分たちの主人の声も覚えているようで、正臣の声に反応するまで三日ほどかかった。
「ラン、ツァド、そっちは崖だ、戻ってこい。こら、ラム、そっちへ行くな！」
先端の丸まっている、魔法使いがもってそうな杖を手に、正臣はあっちへこっちへと走り回る。全力疾走、インターバル、また走るの繰り返しだ。
杖の先端が丸まって居るのは羊の首に引っ掛けて引っ張るためである。羊はド近眼ですぐに目の前に夢中になるので、草を食べながらどんどん遠くへ離れていくのだ。それを正臣は一人で捕まえ続けるのである。
仕事は羊追いだけではない。力仕事も多大な量がある。そもそも羊を杖の先端で引っ掛けて、引き戻すだって大変な力仕事だ。さらに、ワー達の身体基準での運搬作業もあるため、正臣は一日中トレーニングジムでダンベル上げをやっているような労働を強いられる。
勿論、一日が終わればくたくただ。自分のテントで死んだように眠る。
しばらくすると、正臣が苦労して温めた毛皮の中にA子が潜り込んできて、布団を半分圧迫して抱き着いてくる。文句を言いたいが、全身疲労していて押しのけることすら

できやしない。
食事は三食、嫌と言うほど肉と豆を食べさせられる。
豆を煮込んだシチューと、羊の肉。あとはよくわからないが、狩りで得た動物の肉。とにかく肉を食い、豆を食い、羊のミルクをながしこんで、栄養をむりやり腹の中に詰め込まれるのだ。
なんでそこまで無理矢理詰め込まれるのかといえば、仕事で浪費するカロリー消費が大きすぎて、そこまで食べないと体がもたないからである。
一日のうち、正臣の休憩時間は午前中だけなので、その時間はA子との言語学習に充て、午後からはまた仕事に駆り出されて日が沈むまでぼろぼろにこき使われる。そのあと腹が膨れるまで肉を詰め込んで、水浴びの後はぼろぼろの体でベッドで眠る。
そんな生活が半年ほど続くことになった。
A子との同衾に反応もしなくなり、羊を追いかけるのを息も切らさず行えるようになり、荷物を運搬も苦ではなくなり、共通語もすらすらとしゃべれるようになった頃。いつまでこんな生活続けているんだろうと、正臣は不意に我に返った。
おや、やっと気が付いたっすか？ なんて、A子は我に返った正臣に小首をかしげて声を上げる。
「そうっすよ。私ら、ちゃんと使命や目的があってこの世界にきてるんで。いつまでもここに居たって何にも変わらないっすよ」

「いやいやいやいや、A子さん。道先案内人って言ってたじゃん。君が導いてくれないと、俺は次に行くところすらわからないんですけど？」
「あっはっは、私に行先なんてわかる訳ないじゃないですか。わかってたらそもそも初っ端から漂流なんてしないっすよ。私たちの運命は神のみぞ知る、っすねー」
「くそ、またアイツかぁ！」
頭を抱えながら、自分を見てニヤニヤしているエリの顔を思い浮かべて、正臣は悔しそうにごろごろと転がって見せる。
その様子にA子はげらげらと笑っているが、そんな掛け合いも、のしのし歩いてやってきた、ワータイガーによって中断された。族長だ。
「おい、ホーヅキ。ちょっと立て。服を脱いで身体を見せろ」
「いやいやいやいや、俺はそっちの気はないんですけど」
自分の身体をかばって後ずさる正臣に、ワータイガーは舌打ちして「頭からかじり殺すぞ」と怖いお言葉を発する。冗談は通じない御仁のようだ。
正臣は慌てて服を脱ぎ捨てて、パンツ一枚になった。A子がにやにやしているが、もうどうでもいい。こいつにはあらゆるところを見られているので、最早恥ずかしいという概念が無くなっている。
「うん、うん、うん……」
ワータイガーは正臣の身体をじろじろと見つめている。そして、しばらくすると正臣

の腹部を、軽く拳で殴打してみせた。
「ぐほっ！？　てめぇ、何しやがる！」
「うむ、よし、ホーヅキ。今日からお前は狩り組だ」
たまらず悲鳴を上げる正臣に、ワータイガーは頷いて腕を組んだ。
「俺の名前はシンバルだ。行くぞ、戦士ホーヅキ。お前は今日から部族の戦士だ」
「ええ、ホウヅキを狩りに連れて行くの？　ちょっと早くない？」
その様子を見ていた、ワーウルフのカラッテが、シンバルに対して不安そうに声をあげる。その声に周りのワー達が集まってきて、正臣の身体をじろじろと見始める。
「良い感じに仕上がってるじゃん。これならヘラジカぐらいいけるだろ？」
「いや、早い早い。マサオミの性格しってるだろ。狩りは無理だって」
「私はホーヅキ、結構度胸あると思うけどにゃー」
わんわん、にゃんにゃん、がやがやとどよめくワー達にもみくちゃにされて、正臣は困惑の表情を浮かべる。半年前と同じような状況が再現されている。半年前と違うのは、わんわん、にゃんにゃんが、ちゃんと言葉として認識できるところだろう。
「族長は俺だ。部族の一員の采配は俺が決める」
シンバルが声を上げると、わんんわんにゃんにゃんの声はぴたりと静かになった。シンバルは、何かを指示してから、そのまま歩いていってしまう。
「やったねホーヅキ。シンバルが名前を名乗るのって信頼されてる証拠なんだよ」

カラッテが近づいてきて、正臣の肩をぱんぱんと叩く。お前ならやると思ってた。そんな表情で正臣の事を評価するのである。
「さすが船長。ということは、これで船長も部族の戦士っすね」
「おめでとう、ホーヅキ！」
やったね！ と二人で手を合わせるA子とカラッテをしばらく眺めて。正臣は自分が致命的な状況に陥っていることに気づく。
「いやいやいやいやいや、俺、ここから旅立てなくなってるじゃん！」
そう、正臣は既に部族の一員をされてしまったのだ。無断で抜け出したら、死の制裁が待っていそうな、絆の深い一族に。

○

「むりむりむりむり！」
二時間後、正臣は決死の形相で巨大な鹿の化け物から逃げていた。闘牛か、バッファローか、そんな生易しい相手ではない。そもそもバッファローはこんな怪獣のようなサイズではない。
「ヘラジカがそっちにいったぞ。マサオミの方に向かってる、追え！」
「でかしたぞホーヅキ、そのまま走れ走れ！」

正臣がヘラジカとかいう化け物に追いかけられているのを見て、族長のシンバルは非常にご機嫌だ。殺す気か！ と叫ぼうと思うが、余計に酸素を使うと息が詰まって、ヘラジカに追い付かれてしまう。追いつかれたら串刺しだ。後は死ぬしかない。

正臣の避難するような視線に気づいたのか、シンバルは丘の上から大きく笑って腕を組んで、叫ぶ。

「安心しろ正臣、今のお前ならヘラジカ程度じゃ追いつかれんよ。後ろ見てみろ」

いわれて正臣が振り返ると、確かに化け物は自分の足に追いつけないようだった。人間の脚力で獣より早く走れるなんてあり得るはずないのだが、どういう訳か走れている。

「なんだ、どうなってるんだ？」

冷静に周りをみると、非常に速いスピードで景色が移動していく。ちょうど乗用車の座席で窓の外を見ているようだ。

「何で俺、こんなに早く走れてるの？」

正臣は自分の感覚と身体能力が一致していないことに激しい混乱を覚える。昨日まではいつも通りの羊追いのルーティーンの中にあったので、ここ最近全速力で走ったことはなかったのだ。

しばらくすると、同じように正臣に並走してくる、ワーキャットと、ワーラビットの二人が、曲刀を抜いて跳躍する。鋼の光がキラリと光り、一閃、二閃。振り返り様にヘラジカとすれ違った。

正臣が振り返ると、そこには既に、走ったままで左右泣き別れになったヘラジカが、観音開きに倒れて、動かなくなっている。
「よーし、初陣で戦士ホーヅキが良い活躍を見せたぞ。今夜は宴会だな。久しぶりに鍋でもやるか」
「おー！」
シンバルが声を上げると、他の狩り部隊のワー達も両手を上げて喜びの雄叫びをあげる。「やったなマサオミ」とか、「半年そこらでシンバルに認められるとか、やるじゃん」とか、次々に肩を叩かれてワー達が正臣を祝福する。
勿論正臣は今起こったことが信じられず、自分の脚をぽんぽんとたたきながら呆然としている。
「じゃ、ヘラジカの運搬は任せた。頼むぞ戦士ホーヅキ」
シンバルや狩り部隊の先輩たちが歩いていってしまっても、正臣は自分の脚を叩いている。そしてしばらくして「え、これ俺が運ぶの？」と、自分が巨大な肉塊を運ばないといけないことにようやく気付いて。正臣は頭を抱えながら苦悩の絶叫をあげた。

○

結局、現場まで二往復して、肉の運搬を終える頃には既に日もとっぷりと暮れていた。

いつの日にか見た、あの恐ろしいぐつぐつと煮立っている鍋の中に、今日仕留めたヘラジカの肉が綺麗に調理されて放り込まれて行く。
「A子さん、俺達も一歩間違うとあの具材だったんですねぇ」
「過ぎたことはいいっこなしっすよ。船長」
なんか元気ないっすね？　と、正臣の様子を見ながらA子が小首をかしげる。
肉だけでなく、野菜の入った草食動物の腸詰を鍋に放り込んでいるカラッテも、正臣の様子に気づいたのか、不思議そうな顔をして正臣の方にやってきた。
「どうしたホウヅキ。鍋できてるよ」
「いや、カラッテ。A子。今日狩りに行って走ったら、車みたいなスピードが出てさ。正直何が起こったのか理解できなくて混乱してるんだ」
「車ってなんだ、ホウヅキ」
小首をかしげるカラッテに、A子が「二輪馬車の事っすよ、と声を上げる」。厳密には全く別の物であるが、馬で引く二輪馬車、つまり戦車（チャリオット）のことだな、と理解したカラッテはけらけらと笑って正臣の肩を叩いた。
「私達ワーは戦車より早いよ。部族の子供だってちょっと頑張ったらそのぐらい早く走れるよ。正臣は半年間羊追いをやったんだから、そのぐらいできて当たり前だよ」
「そうなのか？　俺の知ってる筋トレと全然違うんだが」
「この世界の法則は、元の世界と少し違うのかもしれないっすねぇ」

Ａ子も細かいタネまでは良くわからないようで。車のような速さで走れるという正臣の言葉には懐疑的だ。
そんなもんなのかな、と、正臣が落ち込んだように声を上げると、酒で出来上がったワータイガーのシンバルが、赤い顔でやってくる。
「飲んでるか戦士ホーヅキ、いや、マサオミだったか？　まあ、どっちで呼んでも許せ。お前も飲め。身体は出来上がってるんだ。飲めるだろ」
確かに正臣は先日二十歳になったばっかりだ。差し出されたものは羊のミルクを発酵させた濁り酒で、名前はカヴァと呼ばれている。
「フィジー諸島のカヴァとはちょっと違うっすねぇ」
ちゃっかり酒を口に含んでＡ子が唸り声をあげた。
「いや、待て未成年。お前十四歳だろ」
「残念、つい先日十五歳になったっす。この世界は十五歳から成人なんすよ」
郷に入れば郷に従えっす、というＡ子の言葉は正論そのもので、何となく釈然としないものを感じながら、正臣は白濁の酒に口をつけて、一気に飲み干す。
「よし、マサオミ。良い飲みっぷりだ。それでこそ部族の戦士よ」
満足そうにシンバルが声を上げると、真っ赤になった正臣が目を座らせて息を吐き出す。もう一杯、と手を突き出せばまた並々と酒が注がれる。
「ああ、船長。この酒、飲みやすいっすけど結構、アルコールきついっすよ？」

「馬鹿野郎、飲まずにやってやられるか！」
どこの中年サラリーマンっすか、と目を線にするA子の横で、うっぷんの溜まっている正臣はぐいぐいそれを飲み干していく。
「良い飲みっぷりだ。よし、俺と勝負だ戦士マサオミ。勝ったら娘のカラッテを嫁にくれてやろう」
「ちょ、ちょっとシンバル！？」
真っ赤になって慌てているカラッテとシンバルを交互にみて、あ、親子だったんすね、とA子が声をあげる。にてねーっすねー、という突っ込みを横で聞きながら、正臣はぐらぐらと揺れる世界の中で、なかなか良い気分になっていた。
不思議と、酔いは回っているが嫌な感じではない。まだまだ飲めそうだ。正臣は盃を突き出して、正臣はすべてを忘れて胃袋に液体を流し込んでいく。
最後の最後は、シンバルと飲み比べの勝負に大勝し、「見事だ、戦士マサオミ。次の族長よ」なんて言葉を聞きながら、正臣は仰向けにぶっ倒れた。

「晴海ねぇ、その本なんだよ。真っ白でさ。何にも書いてないじゃん」
「お父さんがね、くれたのよ。たまには自分で本を書いてみたらどうだって。古本屋さんで見つけた真っ白な本なのよ」
「雰囲気あるね。昔の日記帳かな？」

「多分そうなんじゃないかな。折角物語を書くなら雰囲気がある方がいいだろうって」
「へー、晴海ねぇが主人公の話でも書けばいいじゃん」
「ん、そうだね。でも私は、物語の中では主役じゃなくていいの。そうね、顔のないような、脇役が良いな」
「なんだよ、それ、つまんねぇ」
そうだね、と笑う晴海ねぇとのくだらない会話。正臣はそんな幸せな時間の中に浸りながら、うつむいて静かに泣き続けている。

気が付くと、朝を迎えていた。
ヘラジカの肉を食って、羊乳酒を死ぬほど飲んで、正臣はテントにも戻らずに広場で朝を迎えたのだ。まだ夜明けになったばかりの時間のようで、顔を上に向けると、A子が正臣の頭を膝枕をしていた。
「やっと起きたっすねぇ、船長。だめっすよ、何リットル飲んでるんすか」
急性アルコール中毒で死ぬっすよ？　と呆れたように声をあげるが、A子は正臣の額に手のひらを置いて、にこにこと笑っている。
「なんか嬉しそうだな、うわ、さっそく二日酔いが」
「今日の午前中は休まないとだめっすねぇ。いやいや、シンバルをぶったおした船長の雄姿が面白くって。これで船長はカラッテの婿さんですね。思い出しただけでにやにや

がとまらないっすね」
「やめてくれよ、最後らへんあんまり覚えてないんだ。それに、親父の一存で結婚相手がきまるとか、カラッテがかわいそうだろ」
「いやいや、この世界だと父親の言うことは絶対なんすよ。船長。まぁ、酒におぼれるのはいけないっすけど、たまにはこういうガス抜きも必要っすね。本当に半年間おつかれさまでしたっす」
「お疲れっていってくれるのは嬉しいけど、これからどうしようか。A子さん」
太ももの膝枕が意外と心地よくて、正臣は退きもせずにA子に問いかける。
「もうしばらく、ここでお世話になりましょう、船長。昼は行く当てなんて無いって言いましたけど、あれは半分嘘なんす」
「半分？　何がウソなんだ」
「行く当てがなくても、出発ならいつでもできるんすよ。でも、敢えてここにとどまってました。ワーと一緒に生活するのは、基礎力を身に着けるのに最適なんす」
「……車より早く走れるようにしてもらったもんな」
実際になってみてから考えれば、A子の言うことは納得せざるをえない。きっと効果が出る前に同じことを聞いても断固拒絶しただろう。
あえて黙っていたA子の判断は英断だったと言える。
「ワーは、この世界でも屈指の肉体能力を誇る部族っす。元々の身体構造も、もちろん

優れてるんすけど、似たような体つきをしてる、フェルパー（猫獣人）やウェアウルフも、このワーの部族にはかないません。その秘密は生活が鍛錬と直結してることなんす。彼らの鍛錬を生活の一部として行う肉体強化の技術は、この世界の中では屈指なんすよ。船長は、なんとなく『羊追いしかの山』みたいにのどかに生活してた積もりでしょうけど、この半年間で凄いむきむきになってるんすよ。自覚あります？」

「ないな、確かに腹筋は割れたけど」

写真でも撮って見せれば一目瞭然なんすけど、そうっすよね、とA子は返事をしてみせる。その後で正臣のおなかをぽんぽん、とたたきながら続けた。

「せっかくなので、このまま狩りや戦闘の技術も教わってきてくださいっす。この一族の戦士として戦えるようになったら、出発しましょう」

肉体強化はするに越したことはないっすからね、とA子はにっこり笑ってみせる。正臣はしばらく考えてから、A子の顔を見上げて、言う。

「まあ、船員（A子）を体張って守るのは船長の役目だからな」

「そうっすよ、船長。美少女A子ちゃんを守ってくださいっす」

よく言うよ、と正臣は苦笑した後、A子と顔を見合わせてもう一度笑った。

○

正臣が狩り組に引き抜かれてから、更に半年ほど経過した。この島に流れ着いて、厳しい冬が訪れ、それを乗り越えた頃。正臣は狩り組の中でも、立派にその役目をこなせるようになっていた。教えてもらったのは曲刀の使い方だ。刀に似ているので、何となく馴染み、親しみを感じるフォルムをしている。

冶金術はワーの文化には無い。時折やってくる行商と、羊の毛皮などと交換して手に入れるそうだ。貴重な鋼の武器は戦士が持ち、一般のワー達は黒曜石の磨製石器武器を扱うらしい。

つまり正臣が鋼の曲刀を、それも二本も与えられているのは相当信頼されているという証拠なのだ。……というより、シンバルが、正臣とカラッテを結婚させて跡目にする気満々なのである。男に二言はないと、勝手に婚約関係にされてしまった正臣だが、勿論未だにお茶を濁して逃げ続けている。

割と満更でもないカラッテを前に、結婚したくないとはっきり言うのも気の毒で、どうしたものかと正臣は頭を悩ましていた。

閑話休題。

正臣は二本の鋼の曲刀を両手で持って、いつだったか追われていたヘラジカと対面していた。この辺りのヘラジカは凶暴で、キャンプを見るなり突撃してくるので、キャンプに近づく前に迎撃しなければならない。戦士の狩りとは、外敵からキャンプを守るための作業なのである。此方をターゲットに見据えて、ヘラジカは突撃する気満々だ。

正臣は何度か死んだ獣の肉で切れ味を試しているが、肉を両断するのに、意外と力は必要ないことを確認している。
但し、骨は切れない。だから大事なのは角度と速度、そして狙う部位であることを、あらかじめ研究していた。
綺麗に切れ込みを入れるコツは、根元から先端に向けて滑らせるように切ることだ。正臣はワー達のような膂力はないので、いつかのように縦胴真っ二つ、という訳にはいかない。
「よく観察しろ俺、出足を見極めるんだ。避け損ねたら死ぬぞ」
ぶつぶつ言いながら、向かってくるヘラジカの体格を見る。
当然角を斬るのは無理だ。あれは両断できない。
前部、胸部も難しい。頭をまっすぐこちらに向けて走ってくる。
そぎ落とすのは骨のない柔らかい部分。
次の瞬間、ヘラジカが突撃を開始する。全体をよく見ることで、相手の動きの起こりがワンテンポ早くわかる。半年の間にカラッテから教えてもらった技だ。先の先と言うらしい。
ヘラジカが突撃してくる角度は鋭角。正臣は前傾姿勢になって、ヘラジカに向けて走り出す。狙いは一か所だ。ミスは出来ない。
こともあろうに正臣は、正面からヘラジカに突っ込んでいく。

次の瞬間、正臣は脚からスライディングを行った。
ヘラジカの脚の間に潜り込んで、滑りながら曲刀の一本で下部の腹をかっさばく。イメージ通りに鮮血が飛び散って、腹の内容物をぶちまけたヘラジカが倒れ伏した。
「やった……」
正臣が大きく息を吐き出したところで、シンバルがゆっくりと近づいてきた。
「さすが我が娘の婿、戦士マサオミだ。すっかり狩りが出来るようになったな。正直驚いてるよ。人間風情がワーの狩りについてこれるなんて、正直最初は思ってなかったからな。半分からかうつもりだったが、大したもんだ」
「いや、今だって命がけだし。大して力が増えた訳でもないよ、シンバル」
意地でもお義父さんとは呼ばないからなと思いながらも、祝福してくれるのは嬉しい。生還を喜んで、正臣とシンバルは腕をぶつけ合う。
腕を合わせてぶつけるのは部族の戦士の勝利の儀式だ。すっかり正臣を戦友としても認めたシンバルは、正臣を対等の存在として扱ってくれるようになっている。
「んじゃ、帰りましょう。獲物運搬は下っ端の仕事っと」
正臣は軽々とヘラジカ一匹を持ち上げてのしのし歩いていく。その様子に、ワーの戦士たちは目をまんまるにしている。
「いやいやいやいや、なんでマサオミの奴、ヘラジカを丸ごと持ち上げてるの」
「俺達だって半分にしないと苦労するってのに」

驚くワーの戦士の面々をよそに、シンバルは腕を組んで目を線にしている。
「婿殿自身の努力でもあるが、ありゃ俺達とは別物なんだよ。アイツはなんか、うん。とんでもないものの加護を受けてるぜ。一体、婿殿はどんな力ある神に愛されてるんだろうな」
いわゆる半神半人、英雄体質だとシンバルが言うと、戦士たちもほえー、と間抜けな声をあげる。獣人達にそんな無茶苦茶な噂をされているとは露とも知らず、正臣は鼻歌を口ずさみながら集落に戻っていった。

○

「右手と左手が別々に動かないんだよな」
「そんなの、普通誰でもそうだと思うけど」
朝食を食べながら、隣に座って豆のスープを食べているカラッテに、正臣は左右の手を動かしながら話をしていた。横ではA子がチーズをかじっており。ふむふむ、と正臣の話を聞いている。
「こう、一斉に縦に、横に、と動かすときは手が動くんだけど。純粋にばらばらに違う軌道に手を動かそうとするとうまくいかないんだよ」
「ドラムの基礎練習っすねぇ、それができないとドラマーになれないらしいっすよ」

「まじで？」
肉をかじりながら、正臣はＡ子の言葉に頭をガリガリと掻きむしる。
「ドラムってなぁに？」
「太鼓のことっすよ」
「お、太鼓ならカラッテさん、結構自身あるよ」
カホンのように、座って打ち鳴らす太鼓のリズムは、正臣もＡ子も何度も聞いている。カラッテは確かに太鼓の名手だ。
「楽器に限って言うなら、毎日ちょっとずつやってると普通にできるようになるけどね。戦闘技術も結局毎日の積み重ねだよ、正臣」
「じゃあ、地道にコツコツ練習するしかないか。右手と左手で違う動きができたら、もうちょっと楽にヘラシカが仕留められるような気がするんだけどな」
「鍛錬に余念がないっすねぇ、船長。そろそろ旅の目的忘れてませんか？」
「……いやいやいやいや、忘れてないよ？」
ちょっと、狩りが面白くなり始めている自分に気が付いて、正臣は慌てて顔を上げて手を振って見せる。危ない、この世界に来た目的を忘れそうになっていたと、正臣は自戒して頭を掻いた。
その様子を見て、余計な口出ししやがって、とカラッテが露骨に舌打ちする。しばらくＡ子とカラッテがじろじろと見つめ合い始める。

「でも、そろそろ頃合いっすね。船長も大分レベルが上がってるはずっすから。そろそろ船出をするのも悪くないっすね」
「いやいや、マサオミはもうちょっとここで修行していくべきだとおもうよ」
「……行くにしたって、次はどこに行くんだよA子。もう漂流はやだぞ」
「そうっすねぇ、ワーの人々は海図なんて持ってないっすし」
カラッテとガンをつけ終わったA子が肉をはむはむしながら声を上げると、隣に座っているカラッテが目を見開いて耳をぴんと上に向ける。
ワー達の警戒は目に見えてわかりやすい。正臣は肉をかじるのをやめて、カラッテが見た方角に目を向ける。その方向は、海だ。
「船が来る。みんな、ニンゲンが来たぞ！ 石槍もってきて。シンバルも呼んできて！」
同じく耳を立てているワーバニーの女が警戒の声を上げる。ワーの集落は、久しぶりに騒がしくなり始めた。